



移民船と海洋航路

船舶の歴史は、国と国の主要都市をむすぶ輸送手段として発展してきました。それまでは主に商業用として積荷を運ぶ貨物船として国や地域の経済活動を支えていたものが、人口増加や政治情勢等の理由から時代と共により多くの人々を乗せて他国へ移動する貨客船へとその姿を変えていきます。当初は最小限の人員と最大量の積荷を運搬するために用いられてきた貨物船に、大勢の人々を乗せて航行するには様々な困難がありました。そのような時代の転換期に移民船は誕生したのです。

● 貨物船から貨客船へ



佐倉丸

Royal Museums Greenwich提供

日本初の組織的移民政策によりハワイ官約移民第1船として出航したアメリカ船籍の「シティ・オブ・トウキョウ」は、1885(明治18)年1月28日に横須賀に近い長浦港よりハワイへ向けて出航しました。この船は鉄製、4本マスト、2本煙突のスクリュー推進汽船、総5,079トン、米国ジョン・ローチ社で建造されました。

当時の大型貨客船は主に外国船籍の船が多く、国産の大型貨客船(6,000t級)が登場するのは1898(明治31)年を待つことになります。

初の南米移民を乗せたペルー官約移民第1船は「佐倉丸」で、1899(明治32)年2月28日に横浜港からペルーのカヤオ港へ向けて出航しました。「佐倉丸」は1887年に英国Aitken & Mansel(エイトケン&マンセル社)で建造された鋼製汽船で総2,953トン、建造当時の名は「Mogull(モーグル)」といました。写真では船倉から甲板にかけて、日差しや暑さを避けるための天蓋が設けられているのが見てとれます。

沖縄初のペルー移民を乗せて、1906(明治39)年10月16日に出発した船は1887年に英国Swan&Hunter(スワン&ハンター)社で建造された、総3,882トンの船でした。船籍が変更されるたびに船名も変わり、「FIFESHIRE(ファイブシャイア)」、「DUKE OF FIFE(デューク・オブ・ファイフ)」、「厳島丸」となり、1933(昭和8)年広島にて解体されました。日本の移民会社が所有していた「厳島丸」時代は、故障が多く漂流し、移民たちから「いつつくか丸」と揶揄されたこともありました。



厳島丸

South Australian Maritime Museum提供



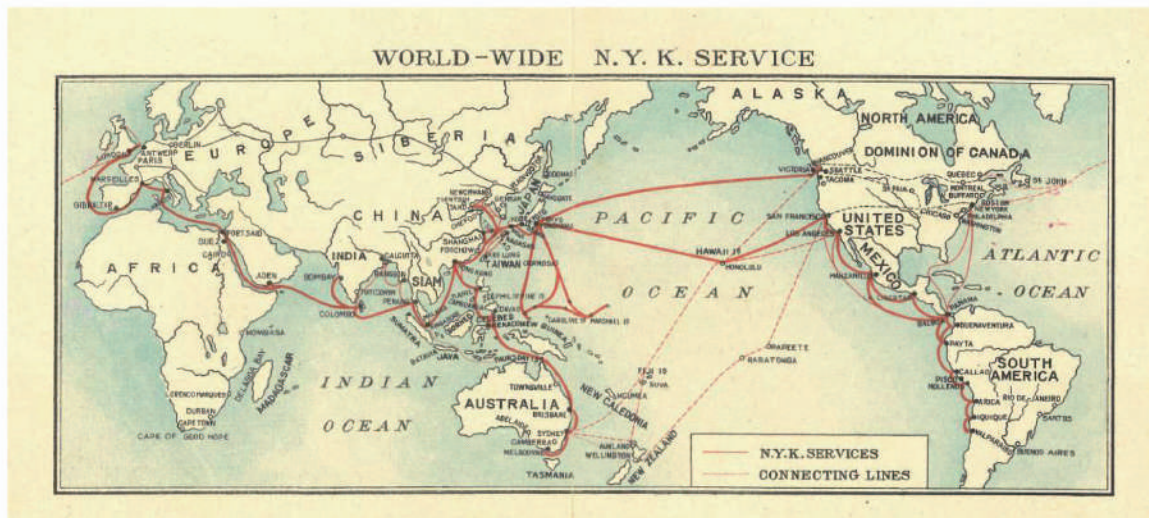
「1930年3月8日。神戸港は雨である。細々とけふる春雨である。海は灰色に霞み街も朝から夕暮れのどきのように暗い。」

1935年第1回芥川賞受賞作品『蒼氓』は、神戸移民収容所へ集まってきた多くの移民希望者が出国するまでの八日間を描いた小説です。故郷を離れて持てるだけの全財産を行李に詰め込み、家族や同郷人同士で身を寄せ合いながら、渡航資金の工面や身体検査、愛する者との別れなど様々な障壁を乗り越えて乗船していきました。著者の石川達三は1930(昭和5)年にブラジル移民船「らぶらた丸」の三等客として乗船し、5年後に発表された同小説には、遠い異郷の地へ夢を託した移民の人々や船内の様子がリアルに描かれています。

『蒼氓』第1部：蒼氓、第2部：南海航路、第3部：声無き民 石川達三/著 資料ID：1002419198

● 海洋航路と定期船

人々の交流が盛んになるにつれて移民船は最盛期を迎え、1914(大正3)年歴史的大事業のパナマ運河開通により海洋航路を拡大していきます。主な海洋航路：北米航路、欧州航路、ペルー南米西岸航路、ブラジル西航南米航路、東航南米航路、豪州航路、他



1931(昭和6)年のN.Y.K.航路図 日本郵船歴史博物館所蔵



「世界のウチナンチュの日」 関連企画展示

ボリビアに生きる－日系社会の中のウチナンチュ

新天地を求めて

● 渡航条件

初期の渡航者たちは独身者も多く出稼ぎ目的で就労しており、何年かすれば郷里へ帰るものと考えていたため、移民先での過酷な労働環境や低賃金に耐えかねて契約途中で逃げ出す者が続出しました。そのためブラジル就労を斡旋する移民会社は安定した労働力を確保するため1家族 3 人以上という「家族移民」を条件としましたが、一つの家族から 3 人もの労働力を輩出できる家は少なく、やむを得ず「構成家族」案が認められることになりました。未婚者は戸主となれるよう結婚し、12 歳以上の働き手ひとり（夫婦いずれかの兄弟姉妹か、おい、めい、いとこ）をつけて、規程に合う家族構成をせねばならず、形式的な養子縁組をした者も少なくありませんでした。こうした移民に関する渡航条件は、後の呼寄せ移民や花嫁移民、労働契約期間の短縮や自由移民の許可など、時代とともに徐々に変化していきました。

● 旅券・海外渡航許可証

1878(明治 11) 年に海外旅券規則が制定され、正式な旅券が発行されました。写真上段は、戦前の初期移民 1914(大正 3) 年 7 月 7 日付のパスポートで契約移民として渡航しており、この頃のパスポートには未だ顔写真がありません。1917(大正 6) 年より旅券への写真貼付が開始され、1925(大正 14) 年 12 月 3 日付には、21 歳で農業移民として渡航したパスポートでは本人写真付きの日本帝国海外旅券が発行されています。(写真下段) ボリビアへは先にペルーやブラジルより転住した者も多く、組織的な移民団が出発したのは戦後 1954(昭和 29) 年のことです。



表面

裏面



表面

裏面

『日本帝国海外旅券（複写）』沖縄県立図書館所蔵

● 移住ポスター

1920(大正 9) 年から 1940(昭和 15) 年代の移民最盛期に入ると貨客船の利用も活発になり、国内の船会社や移民会社所有の船も現れます。これらのポスターには魅力的なコピーと装飾がほどこされ、遠い異国の地で成功を夢見る人々の移住を促進するきっかけとなりました。ポスターには南米航路の寄港地や、勇壮な大型貨客船の姿、異国の雰囲気漂う写真やイラストと共に、1915 年から 1940 年代に竣工した名だたる船籍が多数紹介されています。



1929(昭和 4) 年西航南米航路（パナマ運河経由）に大型ディーゼル貨客船“ぶえのすあいいれす丸”が登場



移民者によるコーヒーの実の選別作業写真 往航では移民者を南米へ運び、復航ではブラジルのコーヒーをニューオリンスへ、綿花と銑鉄を日本へ輸送しました



海外向けに制作された大阪商船の社旗を掲げ持つコンドルのポスター 水平線に大型貨客船の姿が見える



1926(大正 15) 年 8 月 世界一周大航路（南米定期航路）年 10 回出帆、南アフリカ、南米、パナマ、北米経由一周運賃、135 ～ 150 ポンドとある

『移住ポスター』商船三井（旧大阪商船）所蔵



「世界のウチナンチュの日」 関連企画展示

ボリビアに生きる－日系社会の中のウチナンチュ

沖縄県人の最初のボリビア移住

1906(明治39)年10月16日沖縄初のペルー移民36人を乗せた厳島丸が、横浜港から37日間の航海を経て、11月21日にペルーのカヤオ港に到着しました。森岡移民会社取扱いの契約移民はサントクララ耕地へ就労しましたが、当時ペルーの封建的大地主制度下にあって、労働者が土地を手に入れて独立することは容易なことではありませんでした。また、過酷な労働と低賃金に耐えきれず、多くの人々は耕地から都市部に逃亡して雑貨店や飲食店、理髪店等で働いたり、隣国へ出稼ぎに行くようになりました。



厳島丸 南オーストラリア海洋博物館所蔵

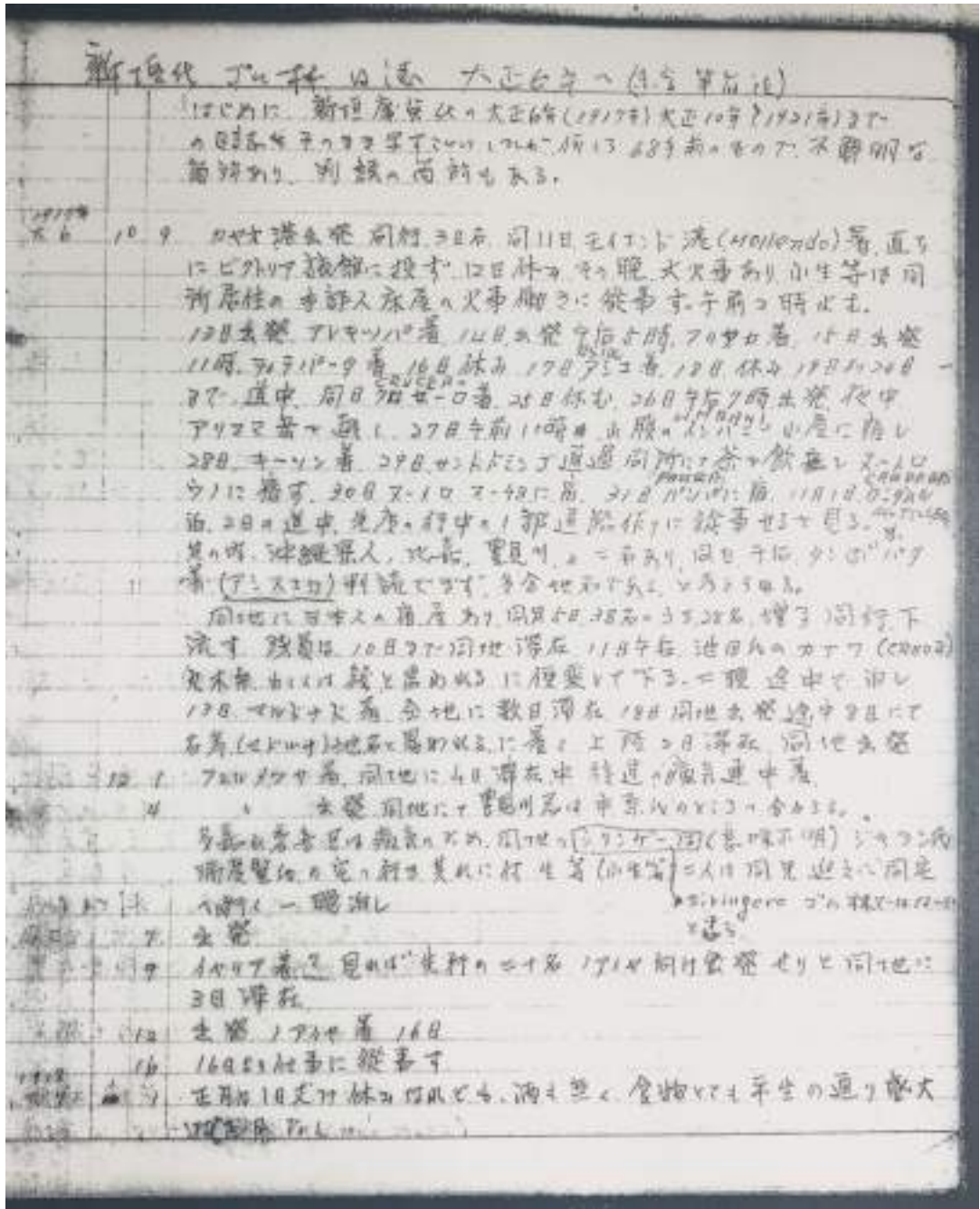
● ペルーからボリビアへの越境

沖縄県人のボリビア移住のはじまりは、1911(明治44)年^{めいじしよくみんごうしがいしや}に明治植民合資会社の八木宣貞氏が県出身者30人を率いて、アマゾン河源流のゴム林地帯へ入ったことが記録にあります。しかし、ゴム林地帯へ到着すると既に7人の沖縄県人がいたことを八木は著書に書き残しており、先にペルーやブラジル等に渡った人々が、ゴム採集の好景気に惹かれてボリビアに転住したと考えられています。

● アマゾン河源流のゴム採集最盛期

^{あらかきようえい}新垣庸英ゴム林日記

1916(大正5)年7月20日に沖縄からペルーへと海を渡り、より良い環境を求めてボリビアへと^{えっきよう}越境した18歳の青年がいました。国頭村安波出身の新垣庸英氏です。彼が残した日記には、ボリビア領アマゾン河源流のゴム林地帯を目指し、モエンド港へ向かうエンペリアル号船上での^{あわ}淡き心境が綴られています。意気揚々とアマゾン河源流にあるゴム林地帯へ向かう新垣ですが、その道程は“66日間”にも及ぶアンデス山を^{いききよう}徒歩越えする過酷なもので、道中に^{どうほう}同胞の墓を目前にして心を^{ふる}奮い立たせる場面や、音信不通となってしまう家族からの手紙を一度に4通も受取り大喜びした様子など、若き青年が遠い故郷を想いながらひたすら夢に向かって突き進んでいく逞しい姿が浮かびあがってきます。



『新垣庸英日記(筆写) 国立国会図書館所蔵



新垣庸英氏(左)1923年



サントクルス市で邦人間に信望の厚い新垣庸英氏ご一家(1969年頃) 沖縄県公文書館所蔵

1917(大正6)年10月9日 ペルー国リマ市出発 15:00 カヤオ港発のエンペリアル号船上

『猛獣住み人跡稀で其の間に無限の宝を蔵し居ると云ふボリビヤ國へ好奇心にかられて、わくわく千金の夢見つつ住み慣れし都を捨て、立出しは去る大正六年も夏気分漂ひ、氷水など売り出る十月は九日であった。』

1917(大正6)年10月17日 アンデス山脈アリコマ山(標高:5,350m)越え1日目

『一行は勇みいさんで出発したが、何分空気希薄の為とは云うものの皆相当かついでいたので、はやる勇氣はまねど疲れし身をば如何にせんで進むに進まれず、僅か4.5里の道も晩方までかかり、其の内4~5名のものは夜になるも着き得ず、ために馬方を雇ふてやった位だ。で皆疲れていたので明くる日は、アシーユに頼み、其のままにアリコマ越えは到底6ヶ敷しいとの事で又荷物を軽くすることに評議まとまり皆絶対必要品の外は全部まとめて運送で送らしむ。』

1917(大正6)年10月26日 アリコマ山 午後7時

『眠れる友よ暝せよ。汝の骨は此の雪中に朽つとも汝の進取の氣象に富める靈は永久に止まり後進の同胞を激励し、汝のあこがれ居たる森林地方の宝庫も我同胞によって開発せらるる事難事にあらさればなり。』

1920(大正9)年5月30日 ボリビア国パンド県ポルベニル

『思ひ出せば足掛け四年になる迄で何の音信も無く故國の父母兄弟妻子は如何なりたるやと朝夕寸時も忘るゝ事なく、思ひ詰めても何たる音信も無く、大いに、力を落し居たる最中、一時に四通迄で受取り嬉心涙に読んだ。』

『新垣庸英日記』より

● 沖縄ボリビア移民社会の発展

資源豊富なボリビア国において栄えたゴム産業も、アジア地域で大型移植プランテーション栽培が始まると時代と共に衰退し、1918(大正7)年には終焉を迎えました。世界中からゴム採集労働者として集まった人々は再びボリビア各地への転住を余儀なくされ、ゴム輸送の集積地として栄えたりベラルタやトリニダート等の都市部、ゴム輸送用に敷設されたマディラ・マモレ鉄道駅周辺など各地へと^{いしよく}離散していきます。急速な発展を遂げたボリビアでの移民の暮らしは、これまでの自給自足の生活から^{さいばい}農牧業・商業・軽工業へと変化していくことになりました。

1920(大正9)年には、「ラ・パス日本人会」が結成され、戦前期日系移民の最盛期を迎えます。雑貨商、理髪業、パン・菓子商、大工職、裁縫業、肉・魚類商、旅人宿、雑種労働者、行商、商店事務員、運送業、飲食店等が増加し、これら日系人のうち沖縄系移民は全体の55%を占めるなど、沖縄ボリビア移民社会は発展して“ウチナンチュネットワーク”の^{さいほう}基盤を形成していきました。



「世界のウチナーンチュの日」 関連企画展示

ボリビアに生きる－日系社会の中のウチナーンチュ

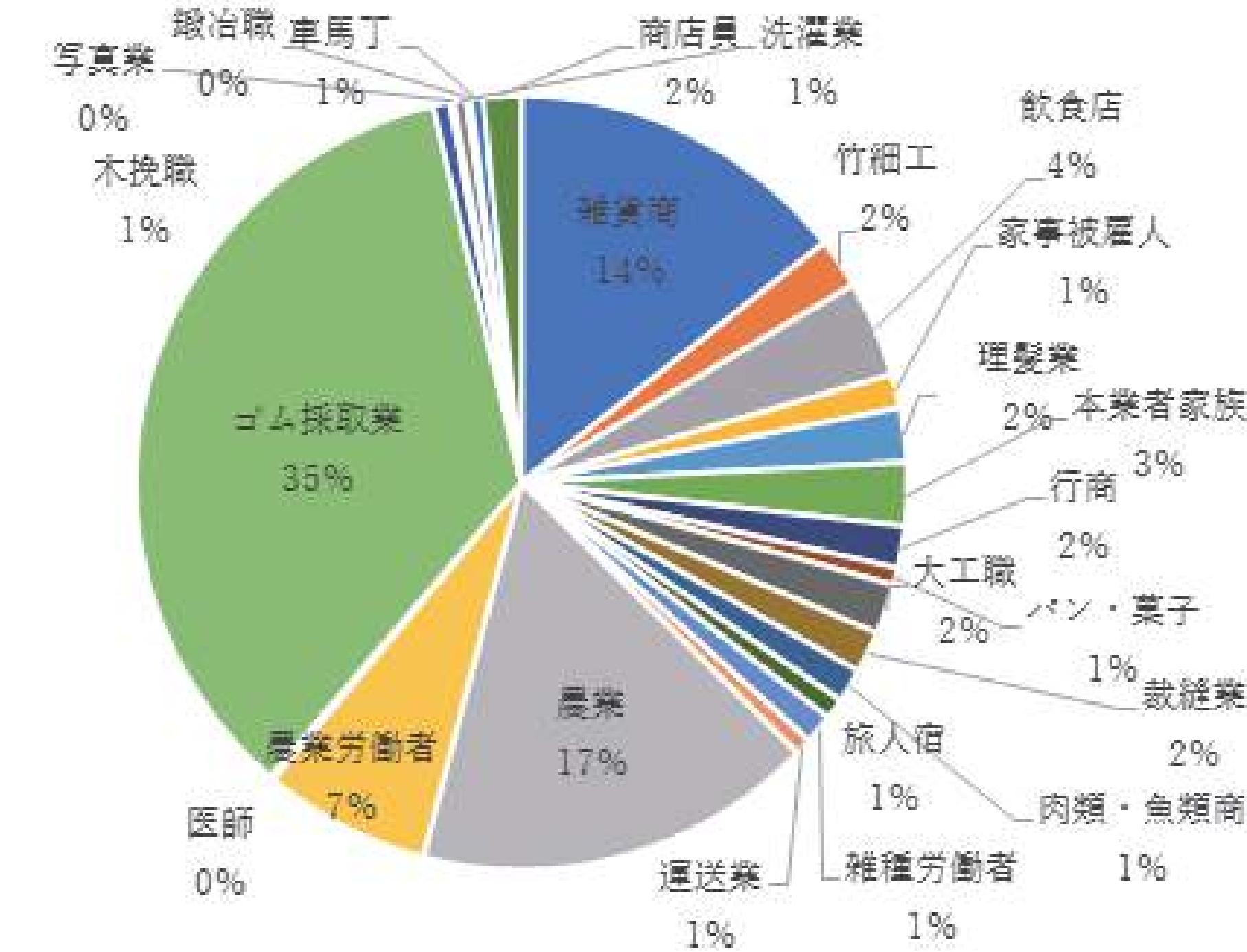
沖縄を支えた移民の生活

1899（明治 32）年頃から密林のジャングルへ分け入り天然ゴム採取職（シリングエロ）に就いた日系移民の人々も、1910(明治 43) 年代から1920（大正 9）年代にはゴム景気の衰退により、ボリビア国内の ラパス、オルロ、ポトシ、コチャバンバ、モンテブランコ、ウイウニ、トリニダード（トマシリ耕地・アウロラ耕地）、リベラルタ等、都市部への移動を余儀なくされました。

● ゴム採取業から農牧業・商業・軽工業の発展

1917（大正 6）年 6 月 ボリビア在留本邦人職業別

職業	人数	%	職業	人数	%
雑貨商	82	14%	雑種労働者	7	1%
竹細工	12	2%	運送業	4	1%
飲食店	23	4%	農業	96	17%
家事被雇人	8	1%	農業労働者	40	7%
理髪業	13	2%	医師	1	0%
本業者家族	15	3%	ゴム採取業	200	35%
行商	10	2%	木挽職	4	1%
パン・菓子	4	1%	写真業	1	0%
大工職	12	2%	洗濯業	3	1%
裁縫業	10	2%	鍛冶職	1	0%
肉類・魚類商	8	1%	車馬丁	3	1%
旅人宿	5	1%	商店員	9	2%
			合 計	571 人	



外務省通商局『旅券下附数及移民統計』1921(大正 10) 年

● 沖縄ボリビア移民 第 1 号

沖縄ボリビア移民第 1 号となるのは、1919（大正 8）年に渡った国頭郡恩納村出身の山城真栄です。しかし、山城の旅券には渡航理由に“兄の呼寄せ”との記載があり、先にペルーやブラジルからボリビアへ転住した人々による“ボリビア移民”がすでに始まっていたことがうかがえます。

戦前の沖縄ボリビア移民が仕事を求めて生きてゆくために国境を越えて渡り歩き、夢を抱き互いに助け合いながら広く移動した事実は、官制移民や入植計画、公式の渡航記録等からは図り知るこのできない歴史の一部を物語っています。

年次	出移民数		全国比
	全国	沖縄	
1916(大正5)年	1	0	0.0%
1917(大正6)年	5	0	0.0%
1918(大正7)年	3	0	0.0%
1919(大正8)年	3	1	33.3%
1920(大正9)年	5	0	0.0%
1921(大正10)年	2	0	0.0%
1922(大正11)年	1	0	0.0%
1923(大正12)年	2	0	0.0%
1924(大正13)年	0	0	－
1925(大正14)年	1	0	0.0%
1926(大正15)年	1	0	0.0%
1927(昭和2)年	5	0	0.0%
1928(昭和3)年	5	1	20.0%

年次	出移民数		全国比
	全国	沖縄	
1929(昭和4)年	21	11	52.4%
1930(昭和5)年	26	3	11.5%
1931(昭和6)年	11	1	9.1%
1932(昭和7)年	15	1	6.7%
1933(昭和8)年	6	3	50.0%
1934(昭和9)年	12	0	0.0%
1935(昭和10)年	16	0	0.0%
1936(昭和11)年	32	13	40.6%
1937(昭和12)年	12	0	0.0%
1938(昭和13)年	14	3	21.4%
1939(昭和14)年	0	0	－
1940(昭和15)年	18	0	0.0%
1941(昭和16)年	9	0	0.0%
合 計	226	37	16.4%

● 郷里への送金

ハワイ契約移民の始まった 1899(明治 32)年の翌年より、海外移民者から沖縄県への送金が始まり、1904(明治 37)年にはメキシコやフィリピン、北米、南洋諸島、中南米へと、移民者が増えるにつれ送金額も増加しました。“ソテツ地獄”といわれた大正期から昭和期にかけての県経済の不況期に、海外からの送金は大きな役割を果たし、1933(昭和 8) 年当時の沖縄県歳入歳出額（決算）に対する海外在留者送金額の占める割合は 37.9%にものぼりました。同年ボリビア国から沖縄への送金額は 2,848 円となっており、白米一升（1.5kg）17 銭の時代に、ボリビア国在留者 1 人あたり 178 円を送金したことになります。

※1 銭は円の 100 分の 1
『沖縄県史 第 7 巻 各論編 6 移民』より

沖縄県における年次別海外移民らの送金額

年次	送金額	1908(明治41)年	675,147	1917(大正6)年	794,000	1926(大正15)年	1,700,945	1935(昭和10)年	2,514,463
1900(明治33)年	480	1909(明治42)年	663,109	1918(大正7)年	948,000	1927(昭和2)年	1,442,531	1936(昭和11)年	2,894,501
1901(明治34)年	2,026	1910(明治43)年	－	1919(大正8)年	1,026,000	1928(昭和3)年	1,861,295	1937(昭和12)年	3,567,094
1902(明治35)年	2,088	1911(明治44)年	815,951	1920(大正9)年	1,214,666	1929(昭和4)年	1,986,160	1938(昭和13)年	1,856,884
1903(明治36)年	16,913	1912(大正1)年	833,000	1921(大正10)年	927,979	1930(昭和5)年	1,572,815	1939(昭和14)年	1,532,461
1904(明治37)年	38,539	1913(大正2)年	831,230	1922(大正11)年	1,423,121	1931(昭和6)年	945,937	1940(昭和15)年	2,459,809
1905(明治38)年	75,856	1914(大正3)年	752,000	1923(大正12)年	861,028	1932(昭和7)年	1,671,962	(単位：円)	
1906(明治39)年	269,556	1915(大正4)年	883,066	1924(大正13)年	1,165,760	1933(昭和8)年	2,082,558		
1907(明治40)年	566,126	1916(大正5)年	1,146,000	1925(大正14)年	1,684,835	1934(昭和9)年	2,416,749		

『明治・大正・昭和戦前期海外沖縄県出身移民からの送金の実態（抜刷）』



戦前移民のボリビア定着と戦時中の体験

沖縄移民の結婚問題

「モーキティクーヨ」(稼いでこい)という言葉と共に送りだされた沖縄移民は、その言葉を胸に南米の各地に雄飛しました。ほとんどの青年たちがお金を蓄えていすれは故郷に錦を飾ることを夢見ていました。しかし、実際には契約満了しても満足な金額を貯められず、もしくは契約途中で過酷な労働と低賃金に耐えかねて契約農地から逃亡し、より多くの稼ぎを求めて、好景気に沸いていたボリビアのゴム林にゴム採集労働者(シリンゲーロ)として分け入っていきました。

1912年頃にはラパス市、リベラルタ町やトリニダ市、オルロ市といった都市部へ、徐々に日系移民の多くは仕事を求めて移動し、定住して各地に日本人会や沖縄県人会が設立されていきました。

1914(大正3)年に結成されたリベラルタ沖縄県人会の規約では、「現地女性との結婚の禁止」の項目もあり、青年たちが現地の女性と結ばれて故郷に戻らないことを危惧しての禁止条項でしたが、一人が規約を破るとやむやんになったといえます。

日系移民の経済力が大きく躍進した1930年代頃から、「移住花嫁」と呼ばれる日本人女性がやって来るようになりました。日本人青年の多くは、お金を蓄えていすれは日本に帰ることを考えていたので、ボリビア人との結婚よりも日本人との結婚を望んでいました。さらに日本人経営者の商店ではボリビア人女性との結婚が禁止されている店もあったといえます。しかし、いくら禁止しても現地の女性との恋愛は止められず、ボリビア人との親戚関係も生まれる一方で、現地の役人たちとの関係も良好なものになっていきました。

第二次大戦中の日系移民の体験

第二次大戦中、ボリビア政府は1942年1月に日本と国交を断絶し、4月には連合国への参加を表明しました。隣国のペルーと同様にラパス市、コチャバンバ市、トリニダ市、リベラルタ町、オルロ市などの主要な都市に在留する日本人の資産は凍結され、ラパス市から26名、コチャバンバ市から2名、オルロ市から1名の計29名がアメリカの強制収容所に送られました。

アメリカ政府によるボリビア在住の敵国人の資産凍結、強制送還の断行は、彼らの祖国への献金を封じることが目的としていました。また、資産凍結の対象は都市部での商業人(理髪店、飲食店経営や農業従事者は対象外とされた)に限られていたので、慌てて農地を購入して田舎に身を隠した者も多数いたといえます。

1943(昭和18)年3月、リベラルタ町では市長や地元郡長、日本人会リーダー13人による秘密会議が設けられ、沖縄系移民の眞志寛長を含む11人の名前が強制収容者リストにあることが告げられました。しかし、地元郡長はこの事態を「やむを得ない」としながらも、「輸送機が飛来したときは速やかに家を離れ、どこかに隠れてください」と呼び掛けたことが議事録に記載されています。

吾等は皆様とは、兄弟も同じようにして暮らしており貴殿等をヤンキ等に引き渡すような事は出来ません。殊に親類関係にある者が多くて断じてヤンキ等の言うようにはさせませんから安心して下さい。

「リベラルタ日本人協議事録」より

アメリカに抑留された29名の日本人一行は、午前8時頃に米軍輸送機でラパス市を出発し、ペルーのアレキパを経由して、その日の夕刻にはペルー北部のタララに到着しました。翌日にはパナマのバルボア港に到着。ここで2ヵ月間逗留し、他国から送られてきた日本人と合流後、今度は船でパナマ運河を通過し、アメリカのルイジアナ州ニューオーリンズに到着。そこでは滅菌のためのDDTを散布されて非常に情けない思いをしたそうです。ニューオーリンズからは陸路でテキサス州の仮収容所に移され、そこで2ヵ月間過ごしたあと、列車でニューメキシコ州サンタフェ収容所に移送されました。収容所での生活は、厳しい規律を強いられましたが、強制労働はなく、ある程度自由が認められていました。また、家族の呼び寄せもできたといえます。

終戦後の送還にあたり、希望してボリビアに戻ってきたのは僅か7名でした。



ラパス日本人会(1935年)
『日本人移住100周年誌 ボリビアに生きる』より



オルロ日本人会(1941年)
『日本人移住100周年誌 ボリビアに生きる』より



トリニダ日本人会(1935年)
『日本人移住100周年誌 ボリビアに生きる』より



『サンタフェ日本人収容所人名録』第3輯[複製資料]
沖縄県立図書館所蔵



「世界のウチナーンチュの日」 関連企画展示

ボリビアに生きる－日系社会の中のウチナーンチュ

戦前の沖縄移民一世（旧移民）

● 八木（屋宜）宣貞



『ペルー日系移民 100 年記念誌』より
1884（明治 17）年 12 月 9 日～
1976（昭和 51）年 6 月 18 日
出身地：首里区崎山町

八木（屋宜）宣貞は、帝国大学を卒業後に田中貞吉著『南米一周』に触発され、1907（明治 40）年 1 月 5 日、22 歳の時に代議士の護得久朝惟の推薦により明治殖民合資会社の第一回沖縄移民 65 名の監督として、横浜港から笠戸丸に乗船し、ペルーのエスキヴェル耕地に渡りました。その後、数年間の耕地労働で貯めたお金を元手にリマ市で日系移民初の雑貨店を開きました。当時、過酷な労働と低賃金に耐えかねて契約農地から逃亡する移民も多く、八木は彼らの救済活動を行うようになりました。

1911（明治 44）年頃、八木は 30 人の沖縄出身の青年たちを率いてゴム景気に沸いていたボリビアへ出稼ぎに行きました。それが沖縄移民最初のボリビア入国の記録といわれていますが、その時のゴム採取作業人たちの引受人は山城信重と仲田という人物で、既にボリビアのゴム林には 7 人の沖縄出身者がいたと八木は証言しています。

しかし、1912（大正元）年頃からゴム需要は下火になり、八木もゴムの採取をあきらめ、リベラルタ町で道路工事や電信塔建設、山林伐開などの仕事につきました。1914（大正 5）年、ボリビア政府から鉄道敷設工事の一部を、ボリビア人メナチョと共同経営の形で請け負いますが、工事は中止となり、共同経営者に資金も持ち逃げされ、窮地に陥りました。その後、八木は多額の借金を抱えてペルーに戻りましたが、ルリン町に居住してからは日用雑貨や綿花などの買い付けを行って借金を返済し、得意の語学を活かして多くの事業を手掛けました。実業家として成功した八木はペルーの日系人社会の中での信頼を獲得し、日本人会会長も歴任しました。

第二次大戦中、ペルー政府と日本政府の国交断絶が通告されると、日系移民は強制送還されることになり、八木も家族と共にアメリカの強制収容所に収監されました。その時にボリビアで絶望の縁に立たされたときのことを思い出したといえます。

戦後、八木は再びペルーに戻って生涯を終えました。

● 具志 寛長



『世界のウチナーンチュ 3』より
1907（明治 40）年～
1989（平成元）年
出身地：今帰仁村渡名喜

具志寛長は、1933（昭和 8）年に弟・寛市と一緒にブラジルへ農業移民として移住しました。具志の移住に先駆けて、1921（大正 10）年に父の寛次郎が森岡商会の契約移民としてペルーに渡っており、翌年にはボリビアに入国し、リベラルタ近郊で牧場経営をしていました。1936（昭和 11）年、具志は父の呼び寄せでブラジルからボリビアへ転住しました。当時、リベラルタ町には約 150 人の沖縄県人がおり、ゴム採集業の最盛期には約 300 人もいたといわれています。

第二次大戦後、地上戦で廃墟と化した郷里の同胞を救済するため、1948（昭和 23）年 8 月にラパス市で「沖縄戦災救援会」が立ち上がると、同 11 月にはベニ県リベラルタ町でも救援会が立ち上がり、具志は会長に就任し、他県人にも呼び掛けて救援活動を始めました。そして土地接収と人口増加に苦しむ沖縄の同胞を救うため、「うるま農産業組合」を立ち上げ、サンタクルス県内で土地を購入し、沖縄移民を入植させる計画をつくりました。この計画は、戦後の沖縄からボリビアへの大規模な移住に大きな影響を与えました。

1954（昭和 29）年に戦後初のボリビア移民団が「うるま植民地」に入植しましたが、その土地は謎の風土病の蔓延や、グランデ河の氾濫などの災害にも見舞われ、移民団はわずか 4 ヶ月で「うるま植民地」を放棄して、パロメティーヤ地区へと移動しました。具志は「うるま植民地」での悲劇の責任をとるようになり、移民団から距離をとるようになり、数年後リベラルタ町に引き上げていきました。最後まで沖縄移民 2 世、3 世の教育や将来のことを憂いながら、1989（平成元）年に他界しました。

● 赤嶺 亀（ホセ赤嶺）



伊芸銀勇撮影「南米巡映写真」
1969 年頃 沖縄県公文書館所蔵
1890（明治 23）年 3 月 9 日～
1977（昭和 52）年 10 月 9 日
出身地：中頭郡與那城村屋慶名

赤嶺亀は、1908（明治 41）年に森岡商会の契約移民農業者としてペルーへ渡航し、2 年間ケブラーダ耕地で働いたあと、アマゾン奥地のゴム採取労働者としてボリビアに入りました。

1918（大正 7）年頃にリベラルタ町を経由してサンタクルス市に移住し、行商などで蓄えた資金を元手に商店経営を始めました。

1920 年代に現地のボリビア女性と結婚し、日本人排斥が盛んなサンタクルス市において慈善病院へ多額の寄付を行ったり、チャコ戦争（1932～35 年）当時には国軍の物資輸送に協力するなど、ドン・ホセ・赤嶺として親しまれ、日本人の地位向上に貢献しました。

戦後は具志寛長の呼び掛けに応じ、うるま農産業組合の代表者としてボリビア政府から土地の払い下げを受けるために奮闘しました。また、弟の健秀も兄を手伝って先発隊としてうるま植民地で入植準備をしていたところ、原住民に殺害されてしまいました。尊い犠牲を払いながらも、赤嶺は戦後の移民の世話役として尽力し、1977 年（昭和 52）年、88 歳でこのボリビアの大地で永遠の眠りにつきました。



左から具志寛長、赤嶺亀、安仁屋政得
安仁屋晶著『コンドルの舞う国』より

※グラン・チャコ戦争ともいう。。1932～35 年にボリビアとパラグアイとの領地問題で始まった戦争。1938 年に周辺国とアメリカの仲介によるブエノスアイレス講和条約で戦争は終結した。



戦後移民の移住経路

◆ 那覇港から戦後移民が出発



別れを惜しんで千切れるほどになげ交うテープ（1959年）
『今日の琉球』第3巻第9号（通巻23号）USCAR 1959年発行

◆ 1954年に戦後の第1次移民団が乗船したチサダネ号



那覇港を出発した船は香港、シンガポール、モーリシャス、南アフリカ共和国を経由してブラジルのサントス港に入港しました。

🇧🇷 船上での赤道祭り（運動会）



赤道祭り（障害物競争）

🇧🇷 ブラジルのサントス港に上陸



45日間の船旅を終えて、サントス港へ到着。

🇧🇷 ブラジルから列車に乗って国境を越える



今度はSL機関車に乗り換えてボリビアのサンタクルス市パイロン駅に向かう。



ボリビアに向かう列車の中

🇧🇷 ボリビアのパイロン駅に到着

7日間の長い汽車の旅を終え、5台のトラックで「うるま植民地」に向かう。





「世界のウチナーンチュの日」関連企画展示

ボリビアに生きる－日系社会の中のウチナーンチュ

南米移住者募集

移住国

ペルー
ボリビア
ブラジル
アルゼンチン

第1回
8月20日
第2回
12月10日

募集締切

- 1 ボリビア移住者
- 2 ブラジル雇用契約移住者
- 3 ブラジル移民青年隊
- 4 アルゼンチン移民青年隊

▲ 申込は市町村役所へ

琉球政府経済局



新聞・雑誌でみるボリビア移民

◆『今日の琉球』

『今日の琉球』は、琉球列島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands: USCAR）が1957（昭和32）年に創刊した月刊誌で、2年後に同じくUSCARが創刊した『守礼の光』とともに、琉米親善政策の広報を目的として発行された雑誌でした。

琉球政府によって推進された南米移住事業は、米軍基地建設のために土地接収を強行するUSCARにとっては、ただ住民を追い出して土地を奪うだけでなく、代替地を用意して、将来のある希望の大地へと沖縄の住民を移住させる親善政策のニュースとして取り上げられました。



『今日の琉球』第8巻3号表紙
1964（昭和39）年



『今日の琉球』第8巻3号p31
「ボリビア人に模範をしめす沖縄人移住者」
1964（昭和39）年



『今日の琉球』第4巻3号裏表紙
「見送り」鹿島義雄撮影
（第7回沖縄フォートクラブ展より）
1960（昭和35）年



『今日の琉球』第8巻3号
「花嫁移民南米へ発つ」
1964（昭和39）年

✎ 沖縄の新聞で取り上げられたボリビア移民の記事

『琉球新報』、『沖縄タイムス』両紙は競って南米に出発する移民団の記事を掲載しました。記事の多くは、郷里の人たちに見送られ、希望に胸膨らませて、ボリビアの大地へ飛び立つ姿が報道されています。なかには、一族70名が総出で移住した記事もみられます。また、戦後の呼び寄せ花嫁たちの記事もあります。戦前と同じように、先にボリビアに移民した青年たちは、郷里の女性と写真でお見合いをして結婚を決めたそうです。花嫁はブラジルのサントス港に、写真を持って、胸を高鳴らせて花嫁を迎えにいったといいます。



『琉球新報』（夕刊）1954（昭和29）年6月19日付
「ボ国へ晴の鹿島立ち 壮途を祝う埠頭の見送陣」



『琉球新報』（夕刊）
1959（昭和34）年4月19日付
「第7次ボリビア移民鹿島立つ」



『琉球新報』（朝刊）1962（昭和37）年2月18日付
「一門70人がボリビアへ きょう希望の船出」



「世界のウチナンチュの日」 関連企画展示

ボリビアに生きる－日系社会の中のウチナンチュ

コロニア・オキナワにおける医療と教育の歴史

● 移住地での医療の変遷

未開の地を開拓する移住者にとって、医療は死活問題であり、医療体制・設備の整備は、常にコロニア・オキナワの大きな課題でした。初期の移住団に医師は帯同しておらず、移住団内にいた医介輔、看護師資格者及び助産師資格者の 3 名が中心となり、移住者の医療・健康管理の面にあたりました。病原体不明の「うるま病(後にハンタウィルス的一种とほぼ確定)」の発生により、入植 1 年足らずで 15 名の犠牲者が出ましたが、彼らの活躍により多くの命が救われたといわれています。

1956 年、米国の援助による小規模診療所の開所を皮切りに、ボリビア人医師による診療、琉球政府の医師派遣(1959 年—1967 年)、日本政府(1967 年—)による医師派遣、医療体制・設備の整備・充実が図られました。現在は第一移住地に「オキナワ診療所」が設置され、オキナワ日本ボリビア協会が運営を行なっています。日本政府の実施主体である海外移住事業団(1974 年から国際協力事業団 JICA)は、移住者の子弟から医師や看護師を育成し、移住地出身の医師により診療所が運営できるようになりました。患者が年間 8 千人を超える中、非日系人は半数以上を占め、更に増加傾向にあります。また、現在では移住者の高齢化がすすみ、老人福祉や介護などが課題となっています。

※海外移住事業団は、1974年に国際協力事業団(JICA)と発展解消し、その後、2004年には国際協力機構(JICA)と改称しています。

● 移住地での教育の歴史

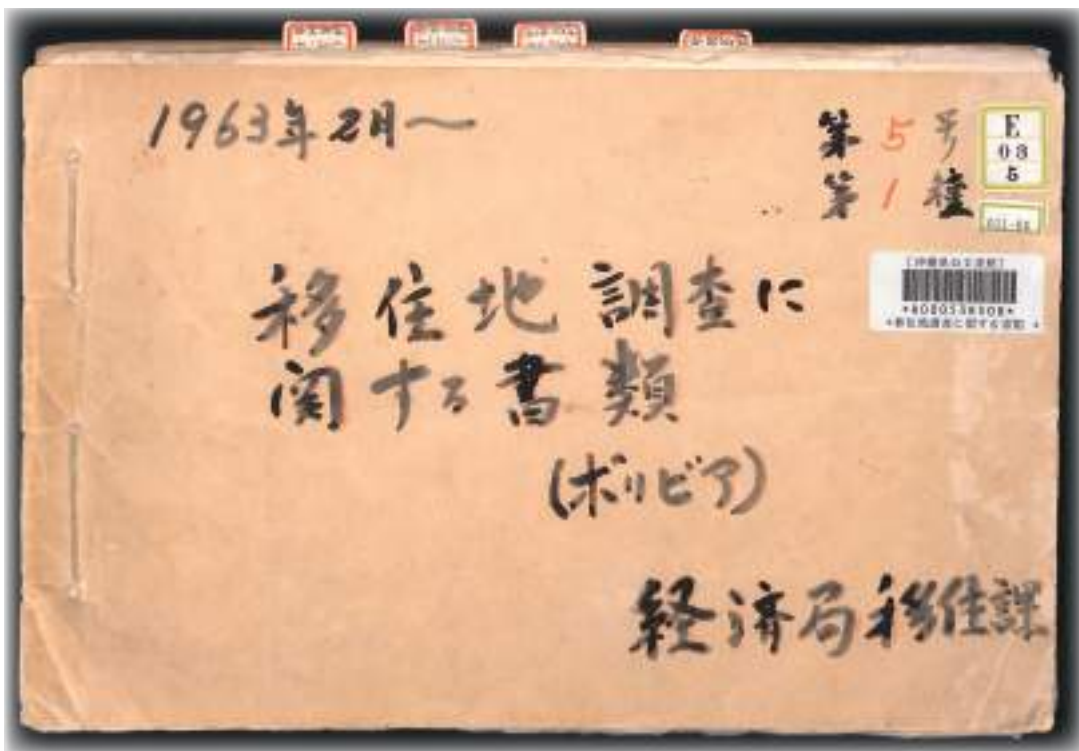
家族での移住が主であった戦後のボリビア移民にとって、子弟の教育は当初から重要な課題でした。1954 年 8 月、第一次移民団はうるま植民地に入植し、当初は住居や生活用水の確保もままならない状況でした。にもかかわらず、9 月初旬には幼稚園が開設され、小学校低学年の授業も徐々に始められました。当初、教室や黒板、机、椅子はもとより、教具や教材、カリキュラムなどもない中で、沖縄から持参した図書や教科書を使用し、かつて教職にあった人々の尽力などによって教育が行われました。

その後、学校の運営主体は、組合、宗教団体(教会)、国(公立)、私立など、移住地の状況や社会情勢などにより変化していきませんが、なかでもカトリック、プロテスタント系教会が大きな役割を担いました。1987 年には、オキナワ日本ボリビア協会が統括するオキナワ第 1 日本ボリビア小中学校が第 1 移住地に設立され、第 2 移住地のヌエバ・エスペランサ小中学校とともに、スペイン語および日本語による教育が行われています。

琉球政府時代には、琉球政府による校舎建設や、高校進学のための寄宿舎建設補助などが行われ、日本に管轄が移ってからは海外移住事業団による現地教師給与の補助、日本語教師の指導育成、教材整備、奨学金などきめ細かい支援が行われました。また、沖縄県は 1986 年から 2013 年まで現職教員を両校に派遣し、日本語指導、沖縄伝統文化の継承等に貢献しています。この事業は 2015 年から国際協力機構(JICA)に引き継がれ、現在も教員派遣が実施されています。



初期移住地では学校まで馬で通いました。
『南米各地移住地写真』
沖縄県公文書館所蔵



琉球政府経済局移住課発行
『1963 年 2 月〜移住地調査に関する書類 (ボリビア)』
沖縄県公文書館所蔵



「初期移住地の校舎」
『ボリビアの大地に生きる沖縄移民』付属CDより

